履　歴　書

令和5年9月21日現在

ふりがな	あざい　ちゃちゃ　　よどどの	男　女
氏　　名	浅井 茶々　　（ 淀殿）	
生年月日	永禄10 年生まれ	

ふりがな　おおさかふおおさかしきたくたいゆうじちょう　たいゆうじ	電話　06-6311-5480
現住所（〒530－ 0051 ） 大阪府大阪市北区太融寺町３-７　太融寺	E-mail
ふりがな	電話
連絡先（〒　　－　　）（現住所以外に連絡を希望する場合のみ記入） 黄泉の国	E-mail

西暦	和暦	歴
1567	永禄10年	北近江の小谷城で浅井長政とお市の方の長女として生まれる
1573	天正 1年	織田信長の弟信包の居城に母お市と次女 初、三女 江とともに引き取られる。
1582	天正10年	母お市が柴田勝家と再嫁し、長女 茶々、三女 江とともに越前北之庄城へ転居
1583	天正11年	賤ヶ岳の戦いの後、長女 茶々、三女 江とともに秀吉に引き取られる
1588	天正16年	1585 羽柴（豊臣）秀吉が太政大臣となり、豊臣姓を名乗る。 秀吉の側室になる。
1589	天正17年	秀吉の子を妊娠したことから、秀吉が築城した山城国の淀城に移り、 淀殿と呼ばれる。長子、豊臣捨(鶴松)を出産。鶴松とともに大坂城へ移る。
1590	天正18年	小田原城攻めの歳、夫、豊臣秀吉から呼ばれ小田原の陣中へ。淀殿24才
1591	天正19年	豊臣鶴松が夭折。
1592	天正20年	小田原城攻めの歳、夫、豊臣秀吉から呼ばれ小田原の陣中へ。淀殿26才
1593	文禄 2年	二男、拾(豊臣秀頼）を出産。
1595	文禄 4年	拾(豊臣秀頼）とともに大坂城に移る。
1598	慶長 3年	秀吉が死没すると、大坂城で豊臣秀頼の後継をつとめる。
1599	慶長 4年	秀吉の正妻、高台院（ねね）が大坂城西の丸から退去、替わって徳川家康が入城。　これにより、大坂城の女主人に。
1603	慶長 8年	徳川秀忠の娘で姪の千姫を、豊臣秀頼の妻に迎える。
1615	元和元年	大坂夏の陣で敗戦、秀頼とともに自害。　淀殿49才

淀殿と豊臣秀吉との間に生まれた2人の息子の名は、捨と拾。実は、捨て子を拾うと成長するという迷信から、最初の子供に捨と命名し、その捨（鶴松）が早世したため、拾にしたと言われています。　子の健康と成長を願うあまりの命名でした。

「茶々」のちの「淀殿」は、1569 年（永禄 12 年）に戦国大名「浅井長政」と、「織田信長」の妹である「お市」との間に長女として誕生。
当時、浅井長政と織田信長は、同盟を結んでいて平穏な日々が流れていました。
ところが、1573 年(天正元年)に、織田信長・徳川家康連合が浅井氏の「小谷城」を攻撃。戦いに敗れた浅井長政は、自害しました。

このとき、市と淀殿ら娘 3 人は救出され、以降、伯父・織田信長の目の届くところで保護されますが、1582 年（天正 10 年）に織田信長が「本能寺の変」で死去。三姉妹は、市が再婚した織田信長の家臣「柴田勝家」の越前国にある「北ノ庄城」へと付いて行きました。
すると今度は、1583 年（天正 11 年）の「賤ヶ岳の戦い」が勃発。羽柴秀吉に敗れた柴田勝家が、市と共に自害してしまったのです。これは淀殿と妹達にとって、2 度目の落城でした。

豊臣秀吉
三姉妹は豊臣秀吉によって保護され、江は「佐治一成」に、初は「京極高次」に嫁ぎます。
そして 1588 年（天正 16 年）頃、淀殿は豊臣秀吉の側室として大坂城へ入ったのです。
当時 27 歳前後だったとされる淀殿が父、兄、養父、そして母の仇で、しかも 50 歳を超えた豊臣秀吉の側室となった経緯はよく分かっていません。
1589 年（天正 17 年）、2 人の間に「捨」のちの「豊臣鶴松」が誕生します。すでに 53 歳で、子宝に恵まれなかった豊臣秀吉はたいそう喜び、淀殿に山城国の「淀城」を与えました。それ以降、天下人の後継者の生母として、発言力を強めていきます。

1591 年（天正 19 年）に鶴松は病死しましたが、2 年後に「拾」のちの「豊臣秀頼」が誕生。
豊臣秀吉は溺愛し、幼子の未来を心配しながら 1598 年（慶長 3 年）に 62 歳で他界しました。
豊臣秀吉の死を契機に出家して「高台院」となった正室「ねね」とは対照的に、淀殿は出家せず、豊臣秀頼の後見人として政治に介入。豊臣氏の家政の実権を握りました。
その頃、豊臣政権内では「石田三成」派と「徳川家康」派が対立、実質的な大坂城主「前田利家」の死によって、敵対関係が鮮明になっていきました。

3 度目の落城
1600 年（慶長 5 年）、上杉征伐のため会津遠征中の徳川家康を相手に、石田三成が挙兵。淀殿

は事態の沈静化のために徳川家康に書状を送りますが、逆に石田三成が謀反を起こしたことを認め、「豊臣秀頼様の御為」という「関ヶ原の戦い」開戦のための大義名分として徳川家康に利用されてしまいました。

このとき石田三成は、戦いを正当化する豊臣秀頼の墨付きの発給と出陣を願いますが、淀殿はそれを認めません。彼女は、西軍・石田三成方、東軍・徳川家康方のどちらにも積極的には加担せず、両軍から微妙に距離を置いて様子を見るだけでした。
そのため「加藤清正」や「福島正則」ら豊臣秀吉恩顧の家臣は、西軍ではなく東軍に加担。その結果、関ヶ原の戦いは東軍の勝利で終わったのです。

関ヶ原の戦いのあと、淀殿は自分と豊臣秀頼が西軍に関与していないことを徳川家康に認めさせ、責任追及を免れます。感謝した彼女は、徳川家康を大坂城で饗応。徳川家康は、豊臣秀頼の父親代わりであるとまで公言したのです。そのあと、豊臣政権を運営していた五大老・五奉行がいなくなった大坂城では、淀殿が主導権を握りました。

一方、1603 年（慶長 8 年）に征夷大将軍となった徳川家康は、江戸幕府を開府。2 年後には「徳川秀忠」を 2 代将軍として世襲させました。
これにより、豊臣秀頼に将軍になるチャンスがないと悟った淀殿は激怒します。畳みかけるように、徳川家康は豊臣秀頼に対して臣従を求め、豊臣秀頼の江戸下向、淀殿の人質としての江戸在住か国替えかを要求しました。徳川家康の主としての自負を持つ淀殿にとって、この要求は屈辱的。これにより、両者の対立は明確になったのです。

そして、1614 年（慶長 19 年）に「大坂の陣」が勃発。
もはや豊臣側には旧来恩顧の大名達による加勢もなく、豊臣秀吉が遺した金銭で浪人を集めて戦いました。豊臣側に加わった「真田幸村（真田信繁）」などの活躍も空しく、1615 年（慶長 20 年）の「大坂夏の陣」で大坂城は落城。
淀殿にとって 3 度目の落城でした。彼女は落城した大坂城内で、豊臣秀頼や臣従する者達と共に自害したのです。

なぜ淀殿は豊臣秀吉の側室になったのか

これは、淀殿最大の疑問、ミステリー、七不思議です。豊臣秀吉に熱望されたとは言え、父、母、養父、兄を殺された仇。長女の彼女は母・市が自害するときに、姉妹を守って生き延びることを託されたことを思うと、父母のように攻め滅ぼされずに済む安全な環境で生き延びることだけを考えたとしても不思議では無いと言われています。
天下人・豊臣秀吉の側室になり、世継ぎを儲け自分の子を天下人にすることで、死んでいった身内の無念を晴らそうとしたと考える人は少なくありません。

子どもに付けた名前の意味
淀殿と豊臣秀吉との間に生まれた 2 人の息子の名は、捨と拾。実は、捨て子を拾うと成長するという迷信から、最初の子供に捨と命名し、その捨（鶴松）が早世したため、拾にしたと言われています。子の健康と成長を願うあまりの命名と伝えられています。

淀殿はどんな人？
豊臣秀吉は、淀殿の母で戦国一の美女の誉れ高い市に憧れていたため、三姉妹のなかで母親の面影を一番よく受け継いでいた長女・淀殿を側室に迎えたという話が有名です。それゆえに、淀殿も美人だったと伝えられています。
他方、淀殿の肖像画に描かれている容姿は、母親似ではなく父親似。
そのため、淀殿は父親の浅井長政譲りの大柄な体格で、美女ではなかったのではないかという説もあり、はっきりしません。
大坂夏の陣で 80kg もの大鎧を身に付け、馬に乗って城内を激励して歩いたという話は、確かにか弱い美人にはそぐわない逸話です。

淀殿が、ただのお嬢様でなかったことは歴史が証明しています。ただし、昨今の研究によって次の説も伝えられています。
向こう気は強いが、政治家の資質はなかった。
淀殿が政治の矢面に立ったのは権力欲からではなく、有能な家臣がおらず、自分がするしかなかったから・・・。
淀殿のヒステリー説は、彼女が愛煙家で豊臣秀吉による「キリスト教禁止令」によって、外国から煙草の輸入がストップしたための中毒症状だった？
時代劇などで描かれている「自信過剰のわがまま」像は、徳川方による後世の印象操作の影響

もあるのではないかと言う説も・・・。

淀殿は、京都で放浪していた従兄の「織田信雄」を大坂城に招いて住まわせ、妹の江が徳川秀忠に再嫁する際に、前夫「羽柴秀勝」との間にできた「完子」を引き取って養育などもしています。父母ら血縁の菩提を弔うための「養源院」の建立、高野山での追善供養なども行ないました。
親兄弟を殺した豊臣秀吉の寵愛を受け入れたのは、本質的に情にほだされやすいお人好しの性格であり、それが災いして徳川家康を信用し、簡単に策略にはまったとも言われています。

ねねや他の側室との関係
世継ぎの生母である淀殿と、若いころから豊臣秀吉を支えた正室・ねねこと高台院との確執はありそうな話ですが、近年 2 人の関係については見直しが進んでいます。
例えば、高台院は 1608 年（慶長 13 年）天然痘にかかった豊臣秀頼のことを気遣い、医師の「曲直瀬道三」に手紙を送っています。
また、豊臣秀吉の死後に出家した高台院が菩提を弔い、淀殿が豊臣秀頼の後見として大坂城に入城したのは、2 人の決裂ではなく菩提を弔うことと、幼少の豊臣秀頼の後見とを 2 人で役割分担した可能性があると新たな見解が示されています。

醍醐寺の桜
後世にドラマで演じられるほど、2 人の間は険悪ではなかったのかもしれません。
ただ、「醍醐の花見」というイベントで、淀殿と従姉妹の「京極竜子」が豊臣秀吉からの杯の順番で争ったとされる逸話も残されています。
淀殿と他の側室達の間においては、また別種の争いがあったことも想像に難くありません。

淀殿と豊臣秀頼の関係
豊臣秀吉は、多くの側室を抱えていたにもかかわらず、他に子どもがなかったことから、淀殿と豊臣秀吉の間に生まれた子どもの父親は、他にいるのではないかという噂が当時からあったと言われています。子どもの本当の父親は、淀殿の乳兄妹である「大野治長」であるとする説が有力ですが、真相を知るのは淀殿だけです。

淀殿を偲ぶ

淀殿が残した和歌

1598 年（慶長 3 年）、豊臣秀吉が晩年に「醍醐寺三宝院」の裏で行なった花見の宴・醍醐の花見がありました。豊臣秀吉、豊臣秀頼、高台院や淀殿など、天下人の近親者から諸大名、配下の女房女中衆など総勢 1,300 人をしたがえた盛大な催しで、淀殿が詠んだ和歌が遺されています。

「はなもまた 君のためにとさきいでて 世にならひなき 春にあふらし」

現代語訳すると、桜もあなたのためにと咲き始めて、この世に 2 つとないすばらしい春に会うことができるでしょう

「あひをひの 松も桜も八千世へん 君かみゆきのけふをはしめに」

現代語訳すると、仲良く共に生える松も桜も八千代という長い時間を経ることでしょう。あなたがいらっしゃる今日を始めとして

どちらも豊臣秀吉、豊臣秀頼、そして豊臣家の永遠の繁栄を願って美しい花と長命の松になぞらえた前向きな気持ちが伝わる和歌です。

養源院

京都府京都市東山区の「蓮華王院」の東向かいに位置する養源院は、1594 年（文禄 3 年）に、父である浅井長政の追善供養のために、淀殿が夫の豊臣秀吉に願って創建した寺院です。

養源院の名前は、浅井長政の法名から付けられました。

落雷によって一度、寺院は焼失していますが、淀殿の妹で徳川秀忠の正室・江が再興。

伏見城落城の際に自刃した武将達の血で染められたいとわれる「血天井」があることで有名です。

淀殿の墓

「太融寺」は、弘法大師空海創建の寺院で、淀殿の墓所となっています。

彼女の遺骨は、大坂城外鴨野郷弁天島に祠を作って埋められ、のちに豊臣家に縁の深いこの寺に移されました。

現在、境内西北隅に六輪塔となって祀られています。